

# 並木に寄りそって

広島県立竹原高等学校

第1学年 西村 妃咲

今年で終戦から七十三年もの月日が経過した。年々、戦争の記憶は薄れ風化の一途を辿る危機的状況にある。戦争の記憶は時間の経過とともに形骸化し、具伴性を欠いてしまっている。

風化の一因として、地獄さながらの戦争という出来事を蔑ろにしていくからだと思う。戦争の記憶が色褪せ、軽視されることを塞ぎ止める為に、今を生きる私たちに後世代から次世代へ戦争の記憶を語り継がなければならぬ。

そこで読んでほしい小説が、史実とフィクションを織り交ぜた『出口のない海』という戦争がコンセプトの小説だ。太平洋戦争を背景にし、回天特別攻撃隊の青年、並木にスポットライトを当てている。特別攻撃隊というワードを聞き反射的に思い浮かぶのは『永遠の0』で題材となった、自らの命を引き換えに操縦する機体を敵艦目掛けて陣当たりをするあの神風特攻隊だと思う。少なくとも『以

前の私はそうだった。だからこそ、回天特別  
 攻撃隊とはどのような部隊なんだろうかと  
 う疑問と興味湧き、この本を手に取り  
 目紛しく戦況が移り変わる戦時下の情景描  
 写や並木の複雑な心情描写がとても生々しく  
 臨場感溢れるもので思わず感情移入しつつペ  
 ージを捲っていった。  
 読み進めていくと、次のような一文が目  
 留まった。  
 “戦争なんて勇ましくも勇ましくもない。た  
 だ、悲しいだけだ”  
 目から鱗だった。私が戦争に持つ印象として  
 は、武力を行使し争い合うもの。そこには、  
 怒りや憎しみが生み出さず忌み嫌うものだと  
 遠ざけていたからだ。だがこの一文を讀み、  
 改めて戦争について考えさせられた。本当に  
 怒りや憎しみをだけしか存在しないのばううか  
 遠ざけていいものかと。  
 非人道的な兵器や命を重くない戦時体制に  
 は当然怒りを覚える。だが考え直すと、自由

かなく貧困に喘ぐ生活、家族を残し戦地へ赴  
 く兵士や残された遺族、それらを思うと胸が  
 締め付けられる。今の私たちとは違い、愛思  
 の尊重・選択の自由・満足のない食事、何も  
 かも制限された生活の中での生活。大切な  
 人が戦地へ赴くことになっても、いかなって  
 と縫い引き止めることも出来はいい。命惜しさ  
 に、武器を捨て戦いから逃げ出すことも叶わ  
 ない。そこで漸く戦争の悲しみに気付いた。  
 私は無意識のうちには戦争という歴史、表の部  
 分を認識していっただけで、本質的な裏の部分  
 は理解してはいなかった。気づけて  
 良かった、と感じた。何故なら、戦争の価値  
 観を遠ざけるべき歴史から、戒めとして継承  
 すべき歴史に改めることが出来たからだ。  
 それからというものは、私は遠ざけてきた戦  
 争の歴史を調べるようになった。夏休みに利  
 用して原爆資料館や大久野島の毒ガス資料館  
 に足を運んだり、戦争がコンセプトとなっ  
 た映画や小説を見てきたり。戦争の歴史を辿り、

知識を深めていく度に気付かされた。戦争の  
 悲しさや虚しさ、日々を過ごしていく中で見  
 逃してしまっような些細な幸せ、今が如何に  
 自由で抑のない暮らしかを。過去のことはと  
 見切りをつけて、戦争に触れたいことは余り  
 にも無責任だ。過ちから背を向けてはならな  
 い。さちんと正面から戦争をという事実を受け  
 止め理解し、語り継いでいくべきだと痛切に  
 感じた。風化の一途を辿る現状に対する危機  
 感、継承していかねければという使命感から  
 かは分からはいかにこの突き動かす衝動の発  
 端は間違いないと出口のない海にあり。、  
 作中で主人公の並木はこう述べた。  
 “俺は回天を伝えるために死ぬ。人間魚雷と  
 いう特攻兵器がこの世に存在した事実を伝え  
 たいんだ”  
 太平洋戦争の昔ならず、今に至るまでに勃発  
 してきた戦争の中で、この思いを胸に戦死し  
 てしまった人は必ずいるだろう。戦争が起こ  
 ってしまう、ではもう後戻りは出来ない。ならば

同じ過ちを繰り返さないよう後世に戦争の記憶を継承しよう、と思いつからう。

継承するが為の死。その死を迎えるにはどれ程の覚悟が必要か。たゞろうか。当事者ではない私には皆目見当か付かないが、計り知れない程の覚悟が必要か。臨む事とは間違いない。我々であるならば、私たちはその犠牲の上に成り立ち、た継承という願いを見届ぞす訳にはいかない。私たちが戦争の記憶と向き合った上で願いを引き継ぎ、永久平和の実現を目指さなければならぬ、と思ふ。

都合の良い事は持ち上げ、都合の悪いことはなれば目を逸らし記憶から薄れさせていくようでは、まゝと永久平和は訪れない。私たちは何度も復習しなければと志れてしまふものだから、語り継いでいかなければならぬ。でないと、また同じ過ちを繰り返してしまふだろう。だから、私はひたすらに平和を祈る。私たちが生きる今と未来を鮮やかに彩る為には

## 指導者の言葉

本校では、「国語総合」の授業の中で、主体的に想像し表現する力を身に付ける指導を行ってきました。本生徒も創作活動をはじめとする言語活動の中で、自身を感じとったものや自身の心情を文章で表現するという力が身に付いてきたと感じています。

本作品では戦争の悲しみに目を向け、時代とともに我々の意識から戦争が薄れていくことに危機感を持ち、戦争の記憶を継承していくことの重要性を述べています。また、この読書をきっかけとして始めた平和学習を通して、感じた思いやこれからの平和への思いを素直かつ情感豊かな言葉で述べられている点が魅力の作品です。

広島県で生まれ育ち、戦争や平和について考える機会が多かった本生徒だからこその行動や思い、言葉であるように感じます。